

# 図書館報

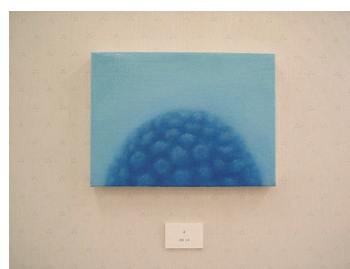
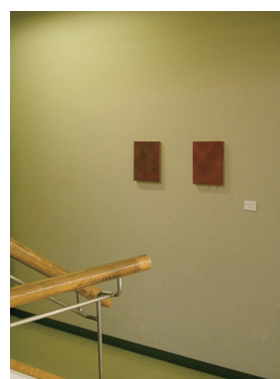
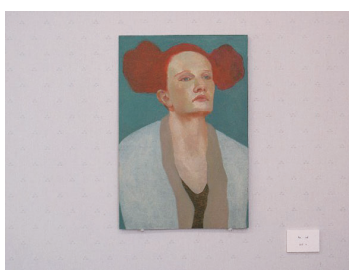
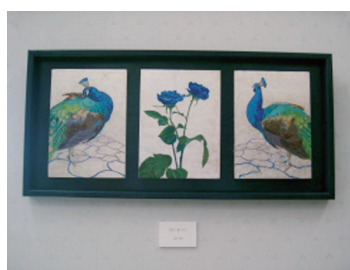
82号

平成21年3月23日発行

## 目次

---

巻頭言	岩見沢館の目標 .....	2
特集	附属図書館懸賞論文 .....	3
	旭川館「図書館コメント大賞」 .....	12
	教職員著作物受贈一覧 .....	14
	附属図書館からのお知らせ .....	16



2009年1月下旬～3月上旬に  
札幌館にて  
芸術文化課程美術コース  
油彩研究室の作品を展示

## 岩見沢館の目標

附属図書館岩見沢館長 佐藤 徹

本学の再編により、岩見沢校は芸術課程およびスポーツ教育課程のみのキャンパスとなりました。これまでの教員養成課程が主体であったときは、図書館の果たす役割も変わってきます。教員養成課程の特色でもあった多彩な研究・教育分野の文献を網羅することがかつての課題でしたが、芸術・スポーツに特化した今日、横の広がりではなく、限られた専門分野の深さが求められます。

その取りかかりとして、常置される雑誌の種類が大幅に変更されます。これまでは、どこの構成館でも各専門分野の雑誌はせいぜい1、2種類であったと思います。岩見沢館では芸術とスポーツに関わるものだけでいいのですから、それぞれの分野でかなりの種類の雑誌が購読できるようになります。また、雑誌だけでなく、図書も他館との交換なども含めて、芸術・スポーツ関連の文献を集約するように作業を進めているところです。今後、芸術・スポーツに関する文献は近隣の大学にはないほどの相当充実したものになると思っています。

今後の目標は、映像および音響（AV）再生機器の充実です。近年、図書館でCDやDVDを視聴する学生の数が非常に増えてきて、機器の整備

が追いつかないほどです。音楽やスポーツを専門とするキャンパスの学生にとってAV設備の充実には他館以上に大きな意義をもっています。ポラニーが暗黙知と知っているような、ことばでは（もちろん数値でも）到底言い尽くせない認識内容が存在すること、またそちらの方が現実の生活世界ではむしろ重要であるということを如実に実感させられるのが芸術や運動の世界です。

とくに、音楽やスポーツの動きは時間ゲシュタルトとあって、時間を捨象すれば成立しないものです。音符を並べてもメロディにはならないし、スポーツの連続写真をどれほど細密に集めても動きは表現できません。生き生きとした動きやメロディを感性的に理解するには、やはり実際の動き、あるいは演奏に近い再生能力を持った機器の整備が望まれます。具体的には、ある程度大きめの液晶テレビと高品質のヘッドホンなどが備えられた密閉ブースのなかで鑑賞できる環境が欲しいところです。

従来の書物を中心とした図書館の役割の重要性については今さらいうまでもありませんが、それに加えて、岩見沢館は芸術・スポーツ専攻学生の感性形成に大きく寄与する図書館として充実を図っていきたいと考えています。

# 特集

～本との出会いを大切にし、素晴らしい本との  
出会いを皆に伝えてほしい～

## 第1回北海道教育大学附属図書館懸賞論文

附属図書館では図書館活性化プロジェクトの一環として、本との出会いを大切にし、素晴らしい本との出会いを皆に伝えてほしいという趣旨のもと、図書館の本の中から読みたい本を選び小論文または読書感想文を書いて応募してもらう懸賞論文を実施しました。(募集期間：平成20年10月27日～12月26日)

学生が本に親しみ、思考・表現および文章作成能力を磨く機会の一つになることを期待したものです。

今回が初めての試みだったので、一体どのくらいの学生が応募してくれるのか不安でしたが、全キャンパスから学部学生・大学院生あわせて39名の応募がありました。応募論文は日本文学から中学校の国語教科書、さらにプロ野球選手の著書を題材に自分の野球経験を語ったものまで多彩な内容となりましたが、厳正な審査の結果、3名が優秀賞に選ばれました。

平成21年2月19日(木)に優秀賞授与式を札幌館で開催し、山本附属図書館長から賞状および記念品(デジタルカメラまたは電子辞書)が授与されました。岩見沢館では3月11日(水)に授与式を行い、佐藤岩見沢館長から授与しました。なお、応募者全員に参加賞を進呈しました。

### 優秀賞

- 磯尾 隼人 (岩見沢校4年)  
「谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」を読む—耽美の花を咲かせて—」
- 原田 香里 (札幌校2年)  
「祖父はなぜビルマの壺琴を愛したか」
- 藤原 与志樹 (大学院教育学研究科1年)  
「図書館を発掘せよ」

(所属・学年は平成20年度現在)

今年も第2回附属図書館懸賞論文を募集する予定ですので、皆さん奮ってご応募ください(募集要領は後日発表)。



募集用ポスター

優秀賞授与式での記念撮影

札幌館



岩見沢館



 第1回懸賞論文優秀賞

## 谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」を読む

### —耽美の花を咲かせて—

磯尾隼人

縁側にひとりさびしくうづくまる  
ねこの背中に秋のかぜ吹く  
(「春、夏、秋」『相聞』昭和四年)

まことに喜ばしき出会いではないか。初めて谷崎潤一郎の小説を読んだのは、高校二年の秋であった。タイトルは「痴人の愛」。比較的長い小説であったが、あまりの面白さのために一気に読んでしまった。それ以来私は、この作家の書いたものを手当たり次第に、貪るように読んでいる。ナオミに魅せられた「痴人の愛」の主人公・河合譲治さながら、谷崎潤一郎の織り成す、はなはだ驚嘆すべき文字による魔術に、うっとり心奪われてしまったのである。河合譲治にも劣らぬ、まさに「痴人」。ナオミの勝ち誇った笑い声がどこからか聞こえてくる……。

谷崎潤一郎は明治・大正・昭和の三代にわたり、五十年以上にもなる長い作家活動の中で数多くの優れた作品を生み出してきた。日本の文学史上における谷崎潤一郎という作家の存在、そして彼の作品は、たとえるならばなまめかしく咲き匂う耽美の花、とでも言おうか。その花の薫りは、万人を妖しく魅了する。今回読んだ「猫と庄造と二人のをんな」(『改造』昭和十一年)もまさしく一輪の耽美の花であり、まぎれもない傑作である。

「猫と庄造と二人のをんな」は関西における庶民の生活を描いた一種の記録であり、庄造という名の男と、彼を奪いあう二人の女性との三角関係を中心に話が展開していく。それに庄造の母であるおりんの思惑が乗っかり、非常に複雑で緊張感のみなぎる人間模様。そして、庄造と二人の女か

ら成る三角関係の真ん中に、リリーという名前のメス猫が堂々と寝そべっている。ちなみに谷崎の猫好きは相当なもので、随筆には「猫——マイペット」(『大阪毎日新聞』昭和五年)など猫に関するものがいくつもあるし、また、千葉俊二の「谷崎文学を貫くもの」(千葉俊二編『谷崎潤一郎必携』學燈社・平成十四年)によると、「猫犬記」という題の、「猫と犬を愛してゐた男がだん〜犬を憎しみ猫を愛スルやうになる」「自分が女(男性)の猫と化しA子に愛撫される」(p8)といった小説の構想も練っていたようである。

庄造は「怠け者の、意気地なしの、働きのない男」であり、「猫を可愛がること、球を撞くこと、盆栽をいぢくること、安カフェエの女をからかひに行くこと」より他に、何の取り柄も楽しみも持たない。作中の会話文に表出する、うねりうねりとした上方方言を体現したような、まさに「瓢箪鯰」のような男である。

「頭の単純な」庄造に対し、彼の母を含めた、庄造を取り囲む三人の女たちは皆ずる賢く、陰険であり、おまけに嫉妬深い。特に庄造の元妻の品子は何かにつけて「賢女ぶる」ために、庄造が無能だけにそれが余計に鼻につくのだろう、彼からひどく憎まれている。庄造はこの女たちのことを愛してはいない。庄造の愛情はただ猫のリリーにのみ注がれる。

庄造はよく、リ、ーのことで品子といさかひをした時分に、「僕リ、ーとは屁まで嗅ぎ合う仲や」など、嫌味めかして云つたものだが、十年の間も一緒に暮らしてゐたとすれば、たとひ一匹の猫であつても、因縁の深い



ものがあるので、考へやうでは、福子や品子より一層親しいとも云へなくはない。事実品子と連れ添うてゐたのは、足かけ四年と云ふけれども正味は二年半ほどであるし、福子も今のところでは、來てからやつと一と月にしかならないのである。さうしてみれば長の年月を共にしてゐたり、一の方が、いろゝな場合の回想と密接につながつてゐる譯で、つまりリ、一と云ふものは、庄造の過去の一部なのである。

人間の女性よりも猫の方が「一層親しい」とは奇妙ではないか。いや、腹の中に「深い企み」を持つ女たちに比べ、リリーは極めて純粋な存在として示される。それゆえ、「猫の美点」が庄造の目には強調されて映るのである。愚かな庄造にとっては、人間の女性よりも「ニヤア」としか言わぬ猫の方が親しみやすいに違いない。そのために庄造はリリーを溺愛するのである。リリーに対する強烈な愛情は、むしろフェティシズムに近いものであるように思われる。リリーはもはや彼の「過去の一部」なのであり、リリーへの愛情は、裏を返せば庄造自身へ向けられていることになるだろう。

庄造の妻である福子は、品子を追い出したことによる満足感と彼女に対する優越感に、庄造の妻としての喜びを見出しているように思われる。ゆえに「猫と女房とを天秤にかけると猫の方が重い」という庄造の価値観は、彼女の「己惚れ」を否定するものであり、そのため庄造から激しく愛されるリリーの存在は、福子にとって不愉快なものなのである。さらに、リリーに対する嫉妬はこの小説の冒頭に据えられている品子の手紙を読んだことによってますます燃え上がる。この嫉妬は庄造に対する愛情からくるものであるとは言えないだろうが、庄造の、リリーへの愛情は福子にしてみればかなり深刻な問題なのだろう。しかしながら、「あんた、わてより猫が大事やねんなあ」などといった福子の痛切な訴えは、リリーのことしか頭

にない庄造にしてみれば、「阿呆らしなつて來る」ものにすぎないのである。

庄造の思考はまことに底の浅いもので、「底に底がある」女たちの知恵には遠く及ばない。庄造をめぐる三人の女それぞれの策略によって、庄造はリリーを手放してしまい、リリーは品子に引き取られることとなる。けれども焦がれる心を胸のうちに封じておくことなど、リリーとの「楽しいいちやつき合い」を生きがいとすする庄造には到底無理な話である。福子に堅く禁じられていたにも関わらず、結局庄造は品子の家を訪ね、こっそりとリリーに面会する。作者の谷崎潤一郎が意地悪な笑みを浮かべ、この面会に超一流のアイロニー溢れる罫を仕掛けたことなど誰が知ろうか。

再会の喜びひとしおと思いきや、あにはからんやリリーは庄造に「ひどく無愛想な一瞥を投げた」だけであつた。猫の方が人間よりもはるかにしたたかではないか。庄造は猫のリリーにあっさりと思捨てられた。品子から愛されるリリーにはもはや庄造の愛など必要ないのである。庄造とリリーとの「いちやつき」ぶりが常軌を逸していただけに、リリーを失った庄造の無念さや失望感はひときわ大きい。そして、庄造の孤独が浮き彫りになる。この物語は次のようなかたちで幕を閉じる。

と、その時ばた〜と足音がして、

「姉さんもうついそこの角まで來てまつせ。」

と、初子が慌しく襖を開けた。

「えッ、そら大變や！」

「裏から出たらあきまへん！……表へ、……表へ廻んなはれ！……穿き物わてが持つて行たげる！ 早よ、早よ！」

彼は轉げるやうに段梯子を駈け下りて、表玄關へ飛んで行つて、初子が土間へ投げつけてくれた板草履を突つかけた。そして往來へ忍び出た途端に、チラと品子の後影が、一と足違ひで裏口の方へ曲つて行つたのが眼に留まると、恐い物にでも追はれるやうに反対の方角へ一散に走つた。



 第1回懸賞論文優秀賞

ふすまを開け閉めする音やドタバタと階段を急いで駆け下りる音が聞こえてくるようである。それどころか庄造の息遣いや追われる者としての恐怖感すら感じられる。庄造の悲しみはもちろん分からないでもない。が、それ以上に一匹の猫に捨てられた男の惨めさや虚しさがあまりにも滑稽でおかしく、まるでコントのようなラスト・シーンであり、「猫と庄造と二人のをんな」という小説にふさわしい完璧な終幕である。読者は辺りに漂う「フンシの匂い」を嗅ぎながら、徐々に遠ざかっていく情けない男の後姿をじっと見つめ続けることとなるのだ。

さて、庄造とおりんとのやりとりや間の抜けた庄造の言動、心理描写、そして女以上に女らしいリリーのしぐさ（このことについては、「猫と庄造と二人のをんな」に限らない。例えば、冒頭に載せた歌の中にある「ひとりさびしくうづくまる」といった言葉は、本来であれば「ねこ」と結びつくものではないだろう）など、読んでいてニヤリとせずにはいられないほど愉快なのであるが、何よりも「猫と庄造と二人のをんな」の魅力の一つとして、会話文に現れる《上方方言》の面白さが挙げられるだろう。思わず声に出してみたくなるような、流暢で味わい深い上方方言は、小説の世界と鮮やかに融和して、情感の溢れる作品を形作るのに役立っている。

谷崎潤一郎の作品に初めて本格的に上方方言が登場したのは、「卍」（『改造』昭和三年～昭和五年）という小説においてである。「卍」は柿内園子という女性の一人称で語られるのだが、会話文はもちろんのこと、地の文まで上方方言という徹底ぶり。

あゝ、……………先生、（柿内未亡人は突然はらゝと涙を流した）……………その疑ひさいなかつたら、……………今日までおめおめ生きてる私やあれしませんねんど、……………さうかて死んでもた人恨んだとこで仕方あれしませんし、今でも光子さんのこと考へたら「憎い」「口

惜しい」思ふより戀しいてゝ、……………あゝ、どうぞ、どうぞ、こない泣いたりしまして堪忍して下さい。……………

哀愁を帯びた女性の声にのって届けられる上方方言は、実に肉感的で陰翳に富み、読むものを耽美の花の咲き匂う快樂郷へと遊ばせてくれることであろう。「卍」からは、谷崎潤一郎の関西に対する憧憬と、上方方言への傾倒や執着がひしひしと伝わってくる。名作である。

ところで、谷崎潤一郎の随筆に「其の歡びを感謝せざるを得ない」（『活動俱樂部』大正九年）というものがある。活動写真好きの谷崎が、活動写真の製作に携わることができた喜びを綴ったものである。私の、谷崎潤一郎に関するこの文章の締めくくりは、非常に恐縮なことではあるがこの随筆のタイトルの言葉を使わせていただくことにしよう。

谷崎潤一郎との邂逅は私にとって大変得難い、貴重なものとなった。谷崎潤一郎というメフィストフェレスによって「痴人」と成り果てた私は、この先も一心不乱に彼の書いたものを読み、耽美の花のあまりの美しさについていまでも酔いしれ、詠嘆することであろう。一人の偉大なる作家に出会ったこと、その歡びを感謝せざるを得ない！

(いそおはやと・岩見沢校4年)





## 祖父はなぜビルマの豎琴を愛したか

原 田 香 里

図書館でこの本に出会った時、私は迷わずこの本を手を取った。生前祖父が私に勧めた本だからである。後にも先にも祖父が私に勧めた本はこの一冊きりであったが、以前読んだ時はどうしてもこの本に共感することができなかった。そのことが納得できず、なぜ祖父の好きな本に共感できなかったのかずっと心に引っかかっていたのである。

私の祖父は第二次世界大戦でビルマ（現ミャンマー）に出兵し、そこで終戦を迎えた。そのときの体験を祖父は私に1度きりだが話してくれたことがあった。その話を聞いた後に読んだこの本からは、祖父が語ったような戦争の厳しさやつらさがほとんど感じられなかった。戦争の厳しさが伝わるような描写がないのである。それなのに、それを体験した祖父がなぜこの本に共感したのだろうかと疑問に思った。祖父が後世に残しかたったこと、伝えたかったのは自分が体験した戦争の惨劇の事実ではないのか。私はこの本をもう一度じっくり読み返したが、やはり祖父の語ったようなビルマ戦はそこになかった。しかし物語の中で水島が自分を殺し、ビルマ僧へ変わっていくにつれ、なぜ祖父がこの本を愛したかという私の疑問に対する答えが見えてきた。

1945年の夏を生きた人々によって、戦争は様々な語られる。祖母が広島県福山市の空に広がる原子爆弾の激しい光を見たとき、祖父はビルマの奥地で身を潜めていた。ビルマに来て4年目、あと数日で日本が降伏し、終戦を迎えることなど祖母も祖父も想像しなかった。ビルマの豎琴の世界はこの頃から終戦の頃を描いたものである。戦争を体験した人々の高齢化が進む中、その人々の語り記した記録が後世の平和主義を支える1つとな

る。いずれ、戦争を体験した人々の話を直接聞くことができなくなる日が来るのである。そのような中、私たちは今ここにあるだけの「戦争を伝える資料」を駆使して後世に平和を伝えなければならぬ。それなのに『ビルマの豎琴』は平和資料館にあるような「真っ黒なお弁当」や「8時15分で止まった時計」、「石畳に焼き付けられた人の影」のようなメッセージ性がない。当時の私はこの本を読んでそのように感じたのである。

この物語の主人公である「うたう部隊」はビルマ戦中、自分たちの合唱に聞き入りながら、絵のような湖に向かってうれしそうに指揮棒を振る隊長の指揮に合わせて歌をうたう。そして故郷の家の人たちにもこの景色を見せてやりたいと心に思う。この部分で私は、竹山道雄は実際にビルマ戦を体験していないからこのように書いてしまうのだと感じた。戦禍の中で日本兵と敵が合唱を通じて和解するという設定上、敵は「はにゅうの宿」等の元は日本の歌ではない歌を共に歌えるイギリス兵でなければならなかった。そして、当時日本軍とイギリス軍が戦っていたビルマの土地はこの物語の舞台として一番都合が良かったのである。そのような点にも私はファンタジーとして戦争を扱う適当さを感じ『ビルマの豎琴』に反発していた。

この作品は終戦後1年をおき、児童向けの読み物をとの依頼により発表されたものである。終戦後の日本は戦争に反対し、兵士を悪者扱いすることが正義であり、それが平和を望む者の当然の考えとされてきた。そのような風潮の中で様々な検閲に耐え、時間をかけて発表されたのがこの作品である。戦記小説や問題提起小説の性格を持たず、そのような作品とは一線を画す『ビルマの豎琴』



## 第1回懸賞論文優秀賞

の主題とは何であろうか。その答えはビルマ僧となった水島が静かに語っている。

終戦を迎えた直後、三角山にたてこもって今もなお日本の勝利を疑わない別の隊に対して水島は降服を進めるが失敗する。命からがら三角山を後にし、水島は傷ついた体を引きずるようにして自分の隊を目指す。原子爆弾で破壊された日本に帰り、皆で日本の再建に尽力するという誓いを守るために、水島はイギリス兵と日本兵の死体が幾重にも折り重なる山を、川を歩き続けた。そして足を止める。ビルマで命を落とした者をいったい誰が供養するのか。それは誰かに任せていいものなのか。日本兵水島としての足跡はここで消える。水島は待ち望んだ日本への帰国も、「うたう部隊」との誓いをも捨ててビルマ僧として戦没者の鎮魂に生涯を捧げることを決心する。

ビルマ僧となった水島上等兵は、戦没者の遺体を埋葬している最中、砂の中から大きなルビーを見つける。そしてこのルビーを見ているうちに、この宝石が死んだ人たちの魂であるように思えてくる。そしてこのルビーをビルマで命を落としたすべての人の遺霊と考えて、肌身離さずに持ち歩き、ただ一人の日本人として祈り続けた。ビルマ僧になりきれず、自分を完全に殺すことなくビルマ僧の振りをする生活がしばらく続く。

そしてある日完全に日本人、「うたう部隊」としての自分を捨て、ビルマ僧に生まれ変わる日が来た。水島はいつも持ち歩いていた、人々の遺慰であるルビーの安置場所を探し、臥仏像の胎内がいいと思い至った。臥仏像の足の裏には胎内に続く入口があり、そこからルビーと豎琴を抱えた水島は胎内に入った。そして思いがけなく外から聞こえてきた「うたう部隊」の合唱を聞く。思わず水島は豎琴を掻き鳴らす。その音を聞き付けて「うたう部隊」の隊員は胎内に続く扉を叩き「おーい、水島！」と叫ぶ。扉一枚をはさんで水島は拳を固めて震えていたのである。

水島の肩の上では、「うたう部隊」が飼ってい

たオウムが同じように「おーい、水島、一緒に帰ろう！」と鳴く。代わりに水島をビルマに残したまま日本へ向かう船の上では、水島が肩に乗せていたオウムが「ああ、やっぱり自分は帰るわけにはいかない！」と鳴く。水島が「うたう部隊」との思い出がつまった豎琴の音色と肩で鳴くオウムの声で「うたう部隊」の水島に戻らなかったのは、首から掛かったルビーが自分の役目を常に思い出させていたからであろう。逆に、この頃の水島はそのルビーの力を借りてビルマ僧を演じていたといえる。

水島は臥仏像の中で、「うたう部隊」との最後の別れというように合唱に合わせて豎琴を掻き鳴らした。それが終わり、からっぽだった臥仏像の胎内にルビーを置くことで水島は密かに臥仏像に命を与えた。水島が生み出した臥仏像の命とは、水島が生み出したビルマ僧の命である「鎮魂という役割」と同じである。ルビーを置き去ることで水島は世界から完全にいなくなり、ビルマ僧が生まれた。ビルマを見渡す臥仏像の中で水島は死んだのであるから、「うたう部隊」は水島という戦友をビルマに残してきたことになる。日本を捨ててまで戦争の為に死んだ人々の鎮魂に従事する。そのような内容の物語は当時の日本の風潮では受け入れ固く、また文学界で戦没者の鎮魂を願うという初めての試みが『ビルマの豎琴』であった。全体を通してこの本の主題は戦没者の鎮魂であると言える。

私が学校から帰ると、祖父はビルマから共に復員した祖父の友人と縁側でよく話をしていた。祖父の友人はビルマ戦で片足を失っていた。たまたま祖父と祖父の友人の間に葉のはさまった『ビルマの豎琴』が置かれていることもあった。その背中を見ていると、いつも「ビルマ」「戦争」という2語が思い起こされた。当時はそれを見て「そのまましておけないこと」をひしひしと感じていた。祖父たちが戦争を体験したという事実を過去のことで終わらせてはいけない。祖父の戦争を後





第1回懸賞論文優秀賞

世に伝えなければいけない。そしてそれは私たちの役目であると感じていた。

しかし『ビルマの豎琴』を読み返して、祖父とその友人の考える「そのままにしておけないこと」というのは私の思うそれとは異なることに気がついた。そこにははっきりとした違いがあるからこそ、初めて『ビルマの豎琴』を読んだときに違和感を覚えたのである。私にとっての「そのままにしておけないこと」とは、祖父の体験したことを過去のことで終わらせてしまうことであつたが、祖父にとっての「そのままにしておけないこと」というのはビルマに残してこなければならなかつた戦友達であるのだと気付いた。祖父にとってはこの本の冒頭の「元気よく帰ってきた部隊」というのは他人ではない。片足を失って復員した祖父の友人にとっても同じである。自分たちは復員した。しかし、いったい何人の戦友を置いてこなければならなかつたか。それがビルマ戦で負つた祖父たちの痛みである。

『ビルマの豎琴』がビルマ戦を忠実に表わし、戦争という問題提起を一番のねらいとする内容であつたなら、この本が祖父と祖父の友人の間に置かれることもなかつただろう。大切なことは、「戦争を二度と起こしてはいけない」と後世に伝えるということだけではない。「1945年の夏までに終わってしまった命を悼み、1945年の夏を越えた人々の気持ちを知ろうとする」ということ。これも大切なことである。私は後者よりも専ら戦争の悲惨さを伝えることだけが頭にあつた。それを祖父は『ビルマの豎琴』を通して教えてくれた気がする。

この小説は竹山道雄が深い鎮魂を目的に執筆したものであるが、だからこそそれ以上のものを読み手に伝える。この小説の主人公である「うたう部隊」は3つの役割をもっている。まずは水島が生んだビルマ僧による鎮魂の役割。それから水島が三角山で没するという戦没者としての役割。「うたう部隊」が戦没者である水島をビルマに残した

まま復員するという役割である。それから読み終えて『ビルマの豎琴』には祖父の体験した戦争のやりきれなさが刻むように記されているからこそ、祖父はこの本を愛したのだと気づいた。図書館でこの本にもう一度出会つたからこそ気づけたことである。この体験を大切にしたいと感じている。

(はらだかおり・札幌校2年)



シュエダゴンパゴダ (ヤンゴン)



## 図書館を発掘せよ

藤原 与志樹

たまに来る友達が、お前の部屋は広くていいと言う。稼ぎに見合う住処を求めて、引っ越すことが多かった。おかげでテレビも食卓も、本棚も。かさばるものはみな、手元を離れた。つまらないかと、友達は言う。ゲーム機もなければ、ステレオもない。言ってしまうえば貧乏なのだが、まあ、確かにそう思うことはある。それでもパソコンでメールのやりとりができるし、本棚がなくても、図書館を使うことができる。

図書館を一番図書館らしく使っているのは、学習障害の子どもたちだろう。つまり、遊びに行くのだ。お気に入りの本を何冊も抱えてきて、床に座ったり、椅子に寝そべったりして過ごす。大学生ともなれば、寝そべるわけにもいかないが、しかし小学校の図書室も、大学の立派な附属図書館も、利用のされかたの理想は、ほとんど変わらないはずだ。大学にだって、寝ころんで読みたい本がある。

そういう本は、ひとそれぞれにあるだろう。だから私は、私の思う一冊を紹介しよう。と言っても、実は普通の本じゃない。教科書と言ってしまおうと別格になるから、雑誌の類とでも思ってほしい。学芸会で『夕鶴』をやったひともあるだろう。その作者、木下順二(1914-2006)らの手になる、改訂『中学国語2』がそれだ。言うまでもないが、これを一般の図書館で読むことはできない。教育大学の図書館ならではの、秘蔵っ子である。

この『中学国語2』が編まれた八〇年代というのは、校内暴力が、全国津々浦々の学校に吹き荒れた時代でもあった。そういう時代の社会的な要求は、教科書に反映されるだろう。そういう見方をすると、あまり面白い本ではないかもしれない。でも、そこに収録された文章は、どのような意図

で収録されたにせよ、その意図の以前にはもう、この世にあった。例えばある宗教が、ベストセラーの一冊を取りあげて、教典だと宣言したとしよう。それでもなお、その一冊が何か、ほかのものに変わってしまうわけではない。分別を発揮して、この本を開いてください。

すると、どう。古今東西の名作佳作が、ダイジェストになって読めるでしょう。面白いところだけを、これ一冊でつまみ食いできるというのは、実に愉快じゃありませんか。これは、どこから読み始めてもいい。よりどりみどり。それだけの数の作品が、この一冊にはある。これを教科書だと思って、最初から律儀にやっごらんない。きつとウンザリする。その意味で、このごろの国語の教科書は、適切な分量を目指していると思う。

私はこの一冊で、国語が好きになった。いや、国語がと言うのは、少々違う気もする。国語という学問は、相変わらず嫌いだから。今はもう、こういう読み方、楽しみ方のできる国語の教科書というのは、なくなったのだろう。なくなって当然とすら、言えるかもしれない。開くたびに、まだ読んだことのないページ、あるいは以前読んだが、もう忘れてしまったページが現れる。それだけの作品数、あるいはそれほどの内容を持った国語の教科書というのは、適切な分量という考え方からすれば、文字通り、無用の長物でしかない。

でもいったい、国語という教科を通じて、いわゆる「この一冊」に出会うことのできた子どもは、何人くらいいるのだろう。「たった一冊の本しか読んだことのない人間を警戒せよ。」という一文に惹かれて応募した、今回の論文であった。しかし書き進むうち、私は私の中で、この一文にはなかなか納得がいけないということに気がついた。



第1回懸賞論文優秀賞

むしろ、百冊の本を読んでいながら、「この一冊」に出会わなかった奇跡のひとを、私は警戒する。いったい、何を読んできたのだろう。そんなふうには、いぶかってしまうが。そのひと個人の問題なのか。

百冊読めば、一冊くらい当たっていきそうなものだ。それでもなお、出会わなかったというのなら、残された可能性として、百冊全部がハズレであったと、考えざるを得ない。全部ハズレ。そんなことが、ありうるのかどうか。そこで私は、自費出版ブームに乗って放出された、ものすごい数の私的な本や、ここ数年、ものすごい勢いで生活の中に浸透してきた、ウェブログなどを思い浮かべる。これらの創作過程は、実に手軽だ。その手軽さは、このごろの商業出版に対しても、そのまま当てはまるように思える。そこから、「この一冊」が生まれうるか。共感や、笑いのツボを突かれることは、まま、あるとしても。

そういうことなら、百冊読んでも駄目だというのも、あり得なくはない。なんだか、宝くじを買うような話になってきた。百ぺん買っても当たらない。そういう本が今、砂漠の黄色い砂塵のように、図書館の棚という棚を埋め尽くそうとしている。図書館は悲鳴をあげた。エンデの『ネバーエンディングストーリー』のごとく、Help me, please. と言ったが、まだ、誰の耳にも届いていないようだ。だから人間よ、図書館を発掘せよ。チリに埋もれた地下の洞窟から、自分たちの足跡を発見したまえ。『中学国語2』が、君を導いてくれる。笑い話のようだが、本当だ。「この一冊」にはなり得ないだろう。けれど、「この一冊」を探す指南をしてくれる。昔のひとと同じに、自分の力で探していけるよう、君を鍛えてくれるはずだ。

八〇年代、荒れに荒れた子どもたちに、大人たちから手渡す一冊の読み物として、改訂『中学国語2』は作られた。先に触れたような意図も、含まれているだろう。でも、それだけではない。私

はみなさんに、できたらそういうところまで、合わせて読んでもらいたいと思う。自分にとっての「この一冊」。卒業までに、みなさんのうちの一人でも多くのひとが、それに出会うことができたらい。仕事に就くと、なかなか、そういう時間は持てないから。

(ふじわらよしき・教育学研究科  
理科教育専修)



## 旭川館「図書館コメント大賞」

図書館活性化プロジェクトの一環として、旭川館では、平成20年10月に「図書館コメント大賞」の企画をスタートしました。

応募方法は、配付した応募用紙に新しく購入した約320冊の岩波ジュニア新書を課題図書として読んでもらうもので、何冊読んでもかまわないというものです。その中から、本を読んだ感想や言葉たくみに表現されたインパクトのあるコメントを記入してもらう。そして、記入した応募用紙は、図書館及び生協に設置した応募箱に投函するというものでした。

募集にあたっては、美術専攻の学生にポスターを制作してもらい、学内の数か所の入口や掲示板に掲示しました。最初は「30人くらい応募してくれたら上出来」という不安な予想をしていました。

ところが、学生による自発的な応募の他に、教員から学生に応募するよう呼びかけてもらう協力もあり、最終的な応募総数は、当初の予想をはるかに超えて195編も集まり、あとで審査委員が思わぬ悲鳴をあげることとなりました。



募集のポスター

### 大賞コメント

わたしはこの本を読んで  
旭教に合格したと言っても  
過言ではありません。

高校の図書室で小論文の勉強をしていた、当時受験生だった私。切羽詰まった状況だったにも関わらず、思わぬタイトルに惹かれ、気付くと読み終えていました。著者の、ミジンコというとんだに小さくともある一つのものに真剣に向き合う姿勢には勇気付けられました。また、人間は大きな生態系のほんの一部に属するにすぎないと実感させられ、自分の中に眠る、無限の可能性を信じてみようという気持ちになりました。

花里孝幸著「ミジンコはあひい！」  
岩波ジュニア新書 532 (2006年4月発行)

11月末で募集を締め切った後、12月に6名の選考委員による選考会議にて、様々な表現がなされた多数の応募作品について、いろいろな角度から検討しました。まず、1次選考を実施して40編に絞りました。次に、数日後の最終選考において、さらに検討を重ねた結果、大賞（最優秀賞）1編を満場一致で決定し、優秀賞については、募集の段階では5編を選出する予定でしたが、いずれの作品も甲乙つけがたかったため、最終的に6編を選出しました。



大賞及び優秀賞が決まり、1次選考を突破した作品も含めて、表彰式終了まで学生ホールにて展示をしました。なお、展示をするにあたり、展示パネルを組み立てる作業が思いのほか手間取った記憶があり、どうにか組み立てたのだが、展示パネルそのものが作品を貼るのに不向きな粘着力の弱いものであったため、強い粘着力の両面テープで補強させるなどの工夫をすることになって、かなりの労力を要しました。(後日談として、表彰式後の後片付けで、パネルを解体して元の場所に戻すのだが、これがまた大変でした。)

また、各受賞者へ受賞の連絡をして、賞状及び賞品などの準備などを経て表彰式の準備をしていくのですが、賞品である図書を包装する作業は、かなりてこずったようです。しかし、苦労のかわりあって包装した賞品は、出来ばえも良かったのではないかと思います。



大賞(最優秀賞)の展示

図書館コメント大賞表彰式は、平成21年1月に学生ホールにて、昼休み時間を利用して実施しました。表彰式当日の作業は、午前中に展示物の移動、掲示物の貼付、机や椅子等の運搬及び配置などをして本番に備えました。

その後の表彰式では、委員の講評に始まり、賞状・賞品の授与、受賞者の記念撮影など、終始なごやかな雰囲気での表彰式となりました。



表彰式の様子

すべての行事を終えて、全体として振り返ると、教員及び学生の協力により多数の応募につながり、図書館の活動に対する理解を深めてもらったと思います。

今回の図書館コメント大賞を図書館利用の一つの機会にして、今後も図書館を利用してもらい、岩波ジュニア新書以外の資料にも興味を持ってもらえたらと期待しています。

(旭川館：上野祥広)



## 教職員著作物受贈一覽 ～ありがとうございました～

平成21年2月10日現在 (敬称略、五十音順)

受贈館略号 (札) 札幌館 (函) 函館館 (旭) 旭川館 (釧) 釧路館 (岩) 岩見沢館

### ◎大森 亨

- ・のびるいのち：子ども (いのちとむきあう；1)  
大森亨監修，草土文化，2008.3，39p (釧)
- ・ひろがるいのち：青年・おとな (いのちとむきあう；2)  
大森亨監修，草土文化，2008.4，39p (釧)
- ・つながるいのち：いのちのリレー (いのちとむきあう；3)  
大森亨監修，草土文化，2008.4，39p (釧)
- ・うまれるいのち：誕生 (いのちとむきあう；4)  
大森亨監修，草土文化，2008.4，39p (釧)

### ◎角 一典

- ・「整備新幹線問題年表：1907-2007 (科研費プロジェクト「公共圏と規範理論」資料集・問題別年表：1)  
角一典編著，法政大学社会学部科研費プロジェクト「公共圏と規範理論」，2008.3，164p (札，函，旭，釧，岩)

### ◎鷹澤 好博

- ・石英1粒子による段丘堆積物層の赤色熱蛍光年代測定法の開発  
科学研究費補助金研究成果報告書，基盤研究C，2008.3，85p，課題番号18540448 (函)

### ◎後藤 秋正

- ・唐代の哀傷文学  
後藤秋正著，研文出版，2006.2，566p (札)

### ◎斎藤 祥子

- ・北海道の洋服化への道：函館を中心に  
斎藤祥子著，青山社，2008.3，162p (札，函，旭，釧，岩)

### ◎坂本 紀子

- ・近代日本黎明期における「就学告諭」の研究  
荒井明夫編，東信堂，2008.2，556p (注) 執筆者共著 (函)

### ◎鈴木 明彦

- ・北海道詩史補遺：1989-2007  
北海道詩人協会編集・発行，2008.5，252p (注) 執筆者共著 (札)
- ・貝殻幻想：若宮明彦詩集 (叢書新世代の詩人たち；24)  
若宮明彦著，加藤幾恵・土曜美術社出版販売，1997.8，79p (注) 本名鈴木明彦 (札)

- ・詩と思想・詩人集二〇〇八年  
詩と思想編集委員会著，2008.10，285p (注) 執筆者共著 (札)

### ◎須田 康之

- ・音更町小中学校における学校規模・学級規模がもつ教育効果に関する研究  
須田康之 [著]，北海道教育大学旭川校・音更町教育委員会・音更町教育研究所，2008.3，81p (旭)

### ◎瀬川 秀良

- ・日記をもとに描いた戦時下の学生生活：昭和16年から19年の東京高師生活 (Singpoo books)  
瀬川秀良著，新風舎，2006.9，190p (函)

### ◎田中 実

- ・おどろき！3年生 (教師もたのしい小学理科授業)  
巻担当：三石初雄；監修：田中実／三石初雄，ルック，2008.4，158p (札)
- ・じっくり！4年生 (教師もたのしい小学理科授業)  
巻担当：三上周治；監修：田中実／三石初雄，ルック，2008.5，165p (札)
- ・なるほど！5年生 (教師もたのしい小学理科授業)  
巻担当：北林雅洋；監修：田中実／三石初雄，ルック，2008.1，167p (札)
- ・なっとく！6年生 (教師もたのしい小学理科授業)  
巻担当：大森亨；監修：田中実／三石初雄，ルック，2008.5，166p (札)

### ◎谷本 晃久

- ・アイヌの交易世界 (シンポジウム&公開講座報告集「アイヌ文化研究の今」；第4回)  
本田優子編，札幌大学ペリフェリア・文化学研究所，2008.10，115p. (注) 執筆者共著 (札)

### ◎玉井 康之

- ・学校評価時代の地域学校運営：パートナーシップを高める実践方策  
玉井康之 [著]，教育開発研究所，2008.10，222p (札，函，旭，岩)

### ◎戸田 竜也

- ・障害のある幼児の保育・教育  
伊勢田亮 [ほか] 共著，明治図書出版，2003.4，

- 200p (注) 執筆者共著 (鈞)
- ・「よい子」じゃなくていいんだよ：障害児のきょうだいの育ちと支援  
戸田竜也著, 新読書社, 2005.7, 99p (鈞)

◎二宮 信一

- ・保幼一小が連携する特別支援教育：就学準備→通学のサポート実務百科  
佐藤暁, 堀口貞子, 二宮信一編著, 明治図書出版, 2008.4, 150p (注) 執筆者共著 (鈞)

◎尾藤 弥生

- ・体験に焦点をあてた日本の伝統音楽「声」のジャンルの教員養成プログラムの開発  
科学研究費補助金研究成果報告書, 基盤研究C2, 2008.3, 80p, 課題番号17530627 (岩)
- ・体験に焦点をあてた日本の伝統音楽の教員養成プログラムの開発  
科学研究費補助金研究成果報告書, 基盤研究C2, 2005.3, 106p, 課題番号14580252 (岩)

◎古屋 光一

- ・フィンランドの理科教育：高度な学びと教員養成  
鈴木誠編著／池田文人 [ほか] 著, 明石書店, 2007.10, 211p (注) 執筆者共著 (旭)
- ・理科教育における真正の評価のためのパフォーマンス課題開発と評価支援のプロジェクト  
科学研究費補助金研究成果報告書, 基盤研究B, 2008.3, 103p, 課題番号17330185 (旭)

◎松浦 俊彦

- ・ナノの世界を観る！：先端科学技術を学ぶ・体験する：平成19年度理数系教員指導力向上研修(希望型)整理番号 教大1013  
北海道教育大学函館校, 2008.2, 52p (注) 執筆者共著 (札, 函)
- ・はじめてのDNA一分子観察：先端バイオイメージング：報告書：平成20年度理数系教員指導力向上研修(希望型)  
北海道教育大学函館校, 2008.12, 44p (注) 執筆者共著 (札, 函, 岩)
- ・子ども実験教室：新幹線のしくみを学ぼう：報告書：独立行政法人科学技術振興機構(JST)平成20年度地域科学技術理解増進活動推進事業・地域活動支援  
北海道教育大学函館校, 2008.12, 53p (札, 函)

◎三橋 功一

- ・先行実践における知を活用した教育実践構想支援システムの開発  
科学研究費補助金研究成果報告書, 基盤研究B, 2008.3, 142p, 課題番号17300259 (函, 旭, 岩)

◎南 聡

- ・南聡歌曲集 [楽譜資料]  
南聡, 全音楽譜出版社, 2008.11 (岩)
- ・二声旋律聴音課題集  
南聡・当摩泰久・久木山直共著, 音楽之友社, 1989.2 (岩)
- ・ピアノ作品集=Works for piano (Zen-on piano library) [楽譜資料]  
南聡, 全音楽譜出版社, 1998, 71p (岩)
- ・The garden of joyful intellection, II = 歓ばしき知識の花園・II [楽譜資料]  
南聡, 日本作曲家協議会, c1988, 1 score (11p.) (岩)
- ・月の自叙伝：op. 20 [楽譜資料]  
南聡, 日本作曲家協議会, 1994, 1 score (18p.) (岩)
- ・「“譬えればー”の注解」：独奏ハーブを伴うオーケストラのための：op. 14-3 (1986) [楽譜資料]  
南聡, 日本作曲家協議会, 1999, 1 score (63p.) (岩)
- ・日本製ロッシニョール No.29 [楽譜資料]  
南聡, 日本作曲家協議会, 2001, 1 score (23p.) (岩)
- ・クラリネットと弦楽四重奏のための2つの断章 op. 42 [楽譜資料]  
南聡, 日本作曲家協議会, 2005, 1 score (27p.) (岩)
- ・二重庭園：2面の二十絃のための [楽譜資料]  
南聡, マザーアース, 2006.4 (岩)
- ・彩色計画・3：二十絃独奏のための [楽譜資料]  
南聡, マザーアース, 2006.7 (岩)
- ・鏡遊戯 [楽譜資料]  
南聡, マザーアース, 2006.12 (岩)
- ・状況上の妖精／静かなる化合：for piano op. 41 [楽譜資料]  
南聡, マザーアース, 2008.5 (岩)
- ・For the Form, For the Point 1: for Flute and Percussion Op. 36-1 [楽譜資料]  
南聡, マザーアース, 2008.9 (岩)
- ・Piano Salad [楽譜資料]  
南聡, 音楽之友社, 2003.3 (岩)

◎百瀬 響

- ・文明開化失われた風俗(歴史文化ライブラリー; 261)  
百瀬響著, 吉川弘文館, 2008.9, 211p (札)

◎萬谷 隆一

- ・小学校英語コミュニティ Celenet の概要：総務省戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)平成19年度採択研究年度報告「北海道における小学校英語指導者サポートのための広域活用可能な教育用 SNS システム及び e-Learning プログラムの開発」  
萬谷隆一, 2008.3, 52p, [課題番号] 072301008 研究代表者：萬谷隆一 (旭)

# LIBRARY NEWS 附属図書館からのお知らせ

## 第2回選書ツアー

附属図書館札幌館では、学生の皆さんに、読みたい本や図書館に置いて欲しい本を直接書店で選んでもらう第2回学生選書ツアーを2008年11月21日に紀伊国屋書店札幌本店で実施しました。6名の学生の方が参加し、46冊の本を選んでくれました。

参加した方の感想と選んだ本の推薦文は、附属図書館札幌館のホームページに掲載しておりますので、ご覧ください。



### 札幌館

- 論文検索のためのデータベース・電子ジャーナルの使用法の習得を目的としたガイダンスを実施しています。個人やゼミ単位等での参加をお待ちしています。

<http://s-opac.sap.hokkyodai.ac.jp/library/top.html>  
〒002-8503 札幌市北区あいの里5条3丁目1-6  
TEL 011-778-0288

### 函館館

- レポート・論文を作成するために必要な資料が見つからないときには、カウンターへご相談ください。各種データベースによる文献探索、他大学図書館から書籍や論文コピーを取り寄せる方法などについて、職員が説明いたします。

<http://www.h-lib.hak.hokkyodai.ac.jp/>  
〒040-8567 函館市八幡町1-2  
TEL 0138-44-4231 (発信専用：0138-44-4399)

### 旭川館

- 絵本コーナーを新たに設けましたので、たくさん読んでください。また、この機会に新着図書の書架にある新しい本もご覧ください。

<http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/office/tosho/>  
〒070-8621 旭川市北門町9丁目  
TEL 0166-59-1235

### 釧路館

- 図書館では引き続きガイダンスを実施しています。  
※新入生向けガイダンスや参考文献収集のためのガイダンスを実施しています。
- グループ学習室でパソコン、プロジェクターを使っのての研究発表予行練習が出来るようになりました。  
くわしくは図書館カウンターにてお問い合わせください。

<http://www.kus.hokkyodai.ac.jp/users/library/>  
〒085-8580 釧路市城山1丁目15-55  
TEL 0154-44-3243

### 岩見沢館

- 論文作成のためのOPAC及びCiNiiの講習会の希望を受け付けています。いつでもカウンターへお問い合わせください。

<http://tosho.iwa.hokkyodai.ac.jp/>  
〒068-8642 岩見沢市緑が丘2丁目34-1  
TEL 0126-32-0240